

中学校における学級経営の改善に関する研究(1)

構成的グループ・エンカウンターを導入した学級経営が 学級の生徒の学力に与える効果の研究

縫部 義憲 菅野 信夫 今川 卓爾
荒谷美津子 作田 武夫 松尾 砂織

I 研究目的

日本教育カウンセラー協会の調査(2000年)によると、中学校において集団を扱うことに困難をきたし、生徒指導や学級経営に行き詰まりを感じているベテラン教師が増加している。生徒指導や学級経営を改善して、これらの教師をサポートすることは、学校における人的資源を活用する上で重要と考える。

本研究では、学級集団形成の発達段階の変遷に応じて、集団が育ち、または崩壊する過程において、問題解決思考で、分析的に対処する学級経営のあり方を考察し、上記の状態にある教師を支援する視点や方法を開発することを目的にしている。今年度の目標は、教育効果の高い学習集団(「学びの準拠集団」)を育成する条件を下記の方法で探ることである。

II 文献研究

学級崩壊のメカニズムを教師の学級経営観とそのリーダーシップの実行の結果から考えた河村(2000a, 2000b)は次の内容を指摘している。

1. 教師と子どもには意図された3点の交流がおこなわれている。(1)文化の継承としての学習指導、(2)社会性の育成としての生徒指導、(3)自己の確立の援助として、試行錯誤する場面を意識的に設定すること。この場合、子どもたちにとって、(1)(2)だけでは、管理され、押さえられた、評価されている、という不満が高まるので、(1)(2)と(3)とを統合することが大切である。授業の場面では、知識の伝達や、学習する態度、自分の考えを発表する場、お互いの考えや思いを分かち合う場が満たされたとき、教室での学習が自分にとって、「意味のある」学びになる。現代に生きる教師個人の権威は、子どもから与えられるものである。子どもたちは、教師を「教え方がうまい、一生懸命やってくれる、自分のことをわかってくれる、親しみやすい」な

どと受け取って、教師の一人ひとりのあり方としての個人的な部分を問う時代になっている。従って、教師は指導と援助の中間地点に位置して、一貫性を持って、子どもたちとの3点の交流のバランスの取り得る教師像を構築する必要がある。

2. 学級集団の状態には次の4局面がある。(1)子どもの居場所となる学級として、集団の中で個人が生きている状態。(2)教師の力で管理された学級として、個人が集団に適応するための大きな努力が必要な状態。(3)バラバラでトラブルの多い学級として、個人が集団の一員という意識の低い状態。(4)崩壊した学級として、個人が集団の中で悪い影響を受ける状態。

3. 学級経営観の違いによる集団の変化には次の2点の特徴がある。(1)学習・生徒指導重視型は、学級崩壊を頻発するおそれがある。(2)自己の確立支援重視型は、学級内にふれあいのある人間関係の確立と学級のルールの確立を統合して達成することで、集団の教育力を高めることができる。

4. 上記の1～3は、教師のリーダーシップの実行の結果であり、次の4タイプがある。(1)指導と援助を統合して強く発揮するタイプで、理想的な学級集団を形成しているもの。(2)指導に偏って発揮するタイプで、「教師の力で管理された学級」に至るもの。(3)援助に偏って発揮するタイプで、「バラバラで、トラブルの多い学級」に至るもの。(4)指導も援助も乏しいタイプですすでに学級崩壊が起こっている状態のもの。

5. 学級崩壊の典型となる次の4局面には、それぞれに崩壊の段階がある。(1)リーダーシップを指導に偏って発揮する教師の場合には、①学級崩壊の初期に、教師の定めたルールで統制されることへの不満から学級内の人間関係がほころんでゆく状態が見られ、②学級崩壊の中期には、学級内の人間関係の崩れが、学級のルールの崩れを生み、学級が集団として継続しない状態に

至る。(2)リーダーシップを子ども個人の援助に偏って発揮する教師の場合には、①学級崩壊の初期に、教師が子どもの感情に流され、教師裁量でのルール変更が頻繁におこり、学級のルールが崩れてゆく状態が見られ、②学級崩壊の中期には、学級のルールの崩れが教師と子ども、子ども同士の間関係を崩している状態に至る。(3)指導も援助も乏しい教師の場合には、①学級崩壊の中期へ一気に至るケースが多い。このときに、指導に用いる注意や叱責の強度を高めてゆくことが多く、学級集団の育成に一貫した計画性がなく、崩壊中期に直接至る。(4)末期の学級崩壊の場合には、多くの生徒が、刹那的、享乐的な楽しさを求め、授業中に私語やトランプをしたり、教師を打ち負かして喜んでいる状態が起こり、その他の生徒は、学級内で目立つ行動を避け、人間関係の希薄な子どもたちが「過半数」と推測した結果の「みんな」が学級を動かす状態に至る。

6. 教育的効果の高い学級集団（「学びの準拠集団」）を育成するためには、次の観点が必要である。集団体験の効果を活用すること（グループアプローチ）。

(1)人間関係の持ち方を身に付ける。(2)社会性を身に付ける。その集団のルールを身につける。最低限のルールを身に付けると、人間関係のトラブルが起き難くなり、安心して本音の交流ができる。こうして満足を体験すると、その集団のルールを取り入れようとする。これが社会性が身についた状態である。(3)自己を確立する。同じメンバーで一定期間生活すると、他者を少しずつ理解するようになり、人間関係が深まる。こうして、お互いの存在を受容し合うことで、自分は自分であるという意識が出てきて、自己が確立する。(4)現実判断能力を身に付ける。集団の期待することにうまく合わせて、心理的な負担を軽減しようとするTPO。生活の知恵を身に付けることだが、これだけでは、損得勘定で動く人間になる。(5)道徳心が身に付く。道徳観を「教える」と現実判断能力が身につく。子どもたちは、所属する集団が好きなら、みんなのためにやってあげる意識が生じて、道徳心が発生する。その社会が好きなら、同じ社会で生きる人を愛せるから、居場所となる集団を持つことから、道徳心は生まれてくる。(6)モデリングにより学習意欲が喚起され、次に自分の存在や行動が承認されて初めて、主体的な意欲が向上し、促進される。その結果、自分の人生を切り開こうという意欲が育つ。

7. 教育的効果の高い学級集団（「学びの準拠集団」）を育てるためには、次の4つが前提となる。(1)ふれあいのある人間関係が確立している。①教師、級友から、受容的・援助的に接してもらえることで、無理せず、ありのままの自分で生活できるので、そこに自分の居

場所を見つけることができる。(2)一定のルールが確立している。①ルールは、子どもたちの自己の確立を促進するものであり、②本音の交流をする場合に生じる人間関係の必要以上の軋轢を軽減する、マナーのようなものである。人間性は、評価するものではなく、尊重するものである。③子どもは、ルールに守られて、級友と本音の感情交流をする勇気が出てくる。自分の素直な表現が相手に受け入れられ、バカにされることはない。その安心感がなければ、自ら自己表現をしようとはしない。これは、学習指導、生徒指導のときも貫かれていなければならない。(3)活発な相互作用が確立している。上記の(1)(2)が教室に確立していれば、教師と子ども、子ども同士の活発な交流が生まれる。役割的な交流の中にも必ず本音の交流が伴い、人間関係がより一層密になってゆく。その結果、級友のいいところを見て学んだり、級友のアドバイスをもらって自信を深めたり、自己の行動を修正してみたりできるようになる。(4)活動を振り返る場面と方法が確立している。①初期集団では、「楽しかった」と感じられる子ども同士の共通体験が、互いの警戒心を緩め、関わろうとするきっかけになる。②中期集団では、「おもしろかった」だけの体験はじきに記憶から消える。「体験したことの意味」を自分なりに振り返り、級友と語り合う活動が、その子どもの心の中に体験した意味を気付かせ、経験として定着するのを促す。その経験は、その子どもの中で、次の学級生活を、より前向きに送るために活用される。

8. 教育的効果の高い学級集団（「学びの準拠集団」）を育てる教師のリーダーシップには、次の3点が大切である。(1)ふれあいのある人間関係を育てるリーダーシップ。①子どもを尊重する。②自己を開示する。③自己の確立を援助する技術を使う。ア. 教師と子どもをつなぐ糸を、教師から投げかける。イ. 気付かせる、整理させる、意味付ける、励ます。ウ. 構成的グループエンカウンターを集団の状態に応じて実施する。(2)学級に一定のルールを確立させるリーダーシップ。①対人関係を形成する不安を軽減する。ア. 話の仕方、聞き方。イ. 言葉や態度は、必ず相手に何らかのメッセージを伝えていること、を子どもに理解させる。ウ. 自分のメッセージに気付く。エ. 相手も自分も気分の良くなる伝え方を工夫させる。②公共性の高いトラブルは、一般化して、子ども全員に考えさせ、共通理解させ、学級のルールに加える。(3)対人関係を形成し、深めるプロセス。①対人関係に不安や気がかりがない。②その人に興味を持つ。③その人から拒絶されないと思える。④その人と関わるきっかけがあった。⑤その人と楽しい交流ができた。⑥その人のいろいろな面を

知った。⑦その人の内面や本音を知った。⑧その人の考え方・価値観がわかった。⑨自分とその人との違いが分かった。⑩自分もその人も、受け入れることができた。この結果として、級友を一個の個性ある人間として関わろうとすることができる。このような相手と、子ども同士の本音の交流が生まれ、互いに成長し合うことができる。教師は、このプロセスを援助してあげることが必要である。傷つくことを恐れ、対人関係を形成できない現代の子どもたちには、その不安を解消する内容をルールとして設定してあげればよいのである。

9. 学級集団の発達段階には、次の4段階がある。
(1)集団初期 ①新しい学級集団に対する不安が強く、仲の良かった者同士が2～3人で固まっている状態。②その周りには、一人で孤立している子どもが何人もいる状態。(2)集団中期 ①4～6人の子どもたちが小集団を作って、学級内に乱立している状態。②グループ同士は接点が少なく、他の小集団と争うことで、結束を高めようとする傾向にあり、初期の規模が拡大した状態。(3)集団後期 ①小集団がいくつか統合され、10前後の中集団ができ、その単位で活動できるような状態。②統合するプロセスは、力の強い集団に弱い集団が徐々に飲み込まれる傾向が見られ、子どもたちの間に地位の階層化が見られることが多い。③男子集団対女子集団の構図が見られる。(4)学級集団完成期 ①中集団が統合して、一つになっている状態。②取り組むべき課題があれば、集団内で、一番適切な子どもがリーダーシップをとり、他の子どもたちも、自分の役割を理解して、組織的に活動できる。

10. 学級集団の発達を促進するために、各段階で指導すべきこと。(1)集団初期 ①まず、子どもたちの学級集団に参加する不安や緊張を軽減する。②ルールが簡単で、一人でも参加でき、かつ楽しい、動きのあるエクササイズや、軽い身体接触をもつ手遊びを取り入れ、親しみを持つきっかけを作る。③教科書の読み合いや、リコーダーの合奏などの協同学習を取り入れる。④多様な二人組みを設定し、仲の良い二者関係を形成するきっかけを豊富につくる。(2)集団中期 ①まず、小集団で協同的な活動をたくさん取り組ませ、小集団を単位とした調べ学習を実施して、役割交流から、感情交流が生まれるように配慮する。②子ども一人ひとりの様々な面が分かり合えるような取り組みをしたり、一人ひとりの取り組みを認め合えるような共有と評価の場を定期的実施する。③小集団を子どもの居場所の基本単位にして、協同で活動するためのルールや役割の取り方、活動を振り返る方法など、集団生活の基本をきちんと身に付けさせる。(3)集団後期 ①中集団

が2つ程度統合された状態で、小集団のリーダー同士を仲良くさせる。②班活動やグループ学習の班を同じにして、友達関係の形成を促進させる。③その後、2つの小集団を1つにしたサッカーのチームや家庭科の調理実習の班を形成させ、共同的な活動に取り組ませる。④中集団には、同じような役割を担う子どもが複数いるから、相互に競争させることなく、自分や相手の考え方を分かち合う場を設定することが大切。⑤この時期は、多くの活動をさせるよりも、精選された活動に中集団を単位にじっくり取り組ませ、しっかり振り返らせることが大切。(4)学級集団完成期 ①活動の内容ごとに適切にリーダーシップを取れる子どもを、仲間の中から選出し、メンバーがそれぞれの役割を分担する仕方、各役割を互いに評価する方法、取り組みや頑張りを認め合う方法を、全校集会の担当などの行事を利用して、体験的に理解させることが必要。②教師は、これらの意味を繰り返し、説明すること。③子どもたちは、自分たちで、集団を動かしてゆく方法と喜びを獲得する。④その結果、子どもたちは、一層主体的、建設的に学級集団に関わろうという意欲が喚起され、子どもたちの自治が生まれてくる。⑤この段階の学級集団は、「子どもの居場所となる集団」となり、この集団での生活を通して、多くのプラスの価値を学ぶことができる状態にある。

Ⅲ 分担研究(その1)

「学習効果をあげるリレーションの形成」

～学びの準拠集団の育成をめざして～

〔ケースの概要〕

1. 対象 アセスメント集団の状況は、下記のとおり。(1)①対象グループは平成13年度入学第一学年。②グループサイズは、1クラス40名の2クラス合計80名。(2)グループ構成の特徴は、①生徒の90%が附属小学校からの連絡入学生で構成。②残り10%の生徒が入学試験による選抜入学生。③連絡入学生(90%)のうち約85%が附属幼稚園からの連絡入学生で構成。約75%の本校生徒は、既に9年間附属学園で過ごした後に、本校へ入学。(3)グループ内の特徴は、①すでに生徒間に多数のサブグループが形成されている。②生徒のサブグループ間に、上下関係が形成されている。③生徒のサブグループは、保護者のグループと重複している。(4)生徒の特徴は、①学習への外的動機付けが強い。②セルフエスティーム(自尊感情)に乏しい生徒が多い。③自律的な行動に乏しい生徒がある。④学力水準(NRTスコア)の傾向は、全国水準を上回っている生徒が約30%、全国水準を下回っている生徒が約30%で、2極分化傾向にある。

Table 1 構成的グループ・エンカウターのエクササイズの内容

月	週	時限	実施したエクササイズ	対象	場所	ねらい
04月	4	1	●「バースデーライン」	生徒	学級教室	リレーション
05月	2	1	●「X先生を知るイエス・ノークイズ」	生徒	学級教室	リレーション
05月	3	1	◎X先生と小指の握手	生徒	学級教室	自己理解 教師との絆
06月	1	2	◎エゴグラムで5人の分身に会おう	生徒	学級教室	自己の再発見
06月	3	1	◎あなたは素敵（公開）	生徒	学級教室	セルフエスティーム向上
07月	1	2	●パスカルで自分を見つめよう	生徒	学級教室	自己盲点の確認
08月	1	3日	★山の生活（林間学校）	生徒	三瓶青年の家	全員一役参加 セルフエスティーム向上
08月	1	2	●新聞紙の使い方	生徒	同上	リフレーミング
09月	1	1	●一夏の思い出	生徒	学級教室	他者理解
10月	1	1	●素敵な我が子	保護者	学級教室	感受性
10月	1	1	◎親のエゴグラム	保護者	学級教室	自己の再発見
11月	2	3	★文化祭参加劇	生徒	体育館	全員一役参加 セルフエスティーム向上
11月	2	1	●気になる一言	保護者	寮談話室	リフレーミング
11月	4	2	◎パスカルで将来を見つめよう	生徒	学級教室	ガイダンス

《記号の意味は、次のとおり。既存SGEは●、新規開発SGEは◎、総合・行事は★》

〔方法〕

1. 研究仮説 (1)育てるカウンセリングにもとづいて「総合的な学習活動」を展開すれば、学習4領域（認知領域、情意領域、精神運動作用領域、相互作用領域）の統合が可能となり、学びの準拠集団の育成が可能となるだろう。①構成的グループエンカウター（以下、SGE）を計画的に展開すれば、学びの準拠集団の育成という目的の達成に効果があるだろう。具体的には、生徒の実態に応じたエクササイズを開発し、学校行事に乗り入れて、SGEを展開し、ガイダンス教育を背景に、SGEを展開する。②河村（1998）の提案した「楽しい学校生活をおくるためのアンケート」（以下Q-U）を活用して教師の指導状況を評価すれば、目的の達成に効果があるだろう。具体的には、定期的にQ-Uを実施し、取り組みの状態を把握して、修正をかける。

2. 対応、介入の方法 (1)SGEのエクササイズの選定 エクササイズの内容は、生徒のセルフエスティームの向上と、生徒間のリレーションの形成に重点を置き、生徒の集団活動における対人不安を軽減するもの、自己開示が進むもの、集団活動における一人ひとりの生徒の活動量や評価される場面が均等になるものを選択した。学級経営に活用するために次の4点を考慮した。①生徒の発達段階と学級集団の状態、②学校教育の中の学級活動および道徳の授業そして総合

学習の時間の一環としての取り組みであること、③メンバーがSGE体験をしたあとも集団生活をともにする、生活場面とSGE体験が連続した継続集団であること、④リーダーとコ・リーダーを、学級担任と養護教諭とがシェアし、TTで対応したこと、である。その4点にもとづいてSGEのエクササイズおよび展開のしかたについては、次の6点を重視した。①学級集団に形成される生徒間の人間関係の形成過程にそったエクササイズにする。②学級集団の成長過程にそったエクササイズを選んで展開する。グループサイズも2人組から4人組へと徐々に拡大してゆく。③SGE体験によって生徒に大きな心理的ダメージを与えないエクササイズにする。④年間を通して、体を動かすエクササイズを展開する。⑤生徒のサポートは、SGE体験以外の時間にも担任教師と養護教諭とが連携して、意識して行い、かつSGE体験と学級活動とが連続するような学級経営を行う。⑥SGEのプログラムの実施時間は、学級の状態によって担任教師が柔軟に運営することとする。そして、國分・縫部（1986、1987）の提案したエクササイズを参考に、SGEのエクササイズを選定した。SGEのエクササイズの内容はTable 1に記した。

〔経過〕

1. 期間は、平成13年4月から12月までの1学期から2学期末までとした。

2. データ集計と経過は、期間をⅠ期及びⅡ期に分け、その経過を見る。

(1)Ⅰ期は、平成13年4月から6月までとした。①Q-Uの実施により、本学年集団を構成する生徒の中には、自己理解、自己受容、セルフエスティームに達成課題のある者が少なからず存在することがわかった。学級集団においては、インフォーマルリーダーがサブグループを形成しながら、フォーマルリーダーを動かしていた。②この状況に対して、今川(2001)は協同する学年団と共に、次のようなコンセプトで介入した。本校の総合学習(Thematic Units)の統合テーマは、「人」である。つまり、「人」を学び、「人」に学び、「人」から学び合うことを実現するために、総合的な学習の時間を創造する。ここでのカリキュラムゴールは、「自己の人生の中に認知と情意を統合し、自分の人生を生き抜く力を身につける」ことである。1年生13歳の領域では、「人間」を扱う。ここでは自己や他者を対象にして学習する。ここで身に付けさせたい技能は、自己を知り、他者を知るための様々なスキルである。その結果、生徒はより豊かな人と人のかかわりを実現することができるようになるであろう。③Q-U学級満足尺度の集計結果とその変化は、ア.学級生活満足群は、40%から38%に減少した。イ.非承認群は、10%から15%に増加した。ウ.侵害行為認知群は、17%から17%で変化なし。エ.学級生活不満満足群は、30%から28%へ減少した。④要支援群は、5名から2名に減少した。内訳は、男子2名から1名へ、女子3名から1名へそれぞれ減少した。

(2)Ⅱ期は、平成13年7月から11月までとした。①この時期には、「自己理解」と「他者理解」をテーマに学習した。ここで生徒が体験したことはSGEやロールプレイなど主としてグループアプローチによるものである。活動の前半で、生徒はこれらの学習項目を、「山の生活」と呼ぶ夏季休業中に行われた独自の行事を計画立案し、準備遂行することによって体験的に学習する。ここでは、主に行事の計画立案の方法や、各種の準備や実際の行事の遂行に必要なコーディネート技能を体験的に学習する。こうすることによって、生徒の学習体験活動は、その後の自己の内面で生きて働くようになる。つまり、認知と情意が自己の中で統合され、知の総合化に向けた横断的総合的な学習体験活動が次第に進められるのである。②次に、文化祭参加劇の創造活動をおこなった。ここでも、全員一人一役として、自分の働きがなければ全体が動かないシステムを準備して、活動の場を提供した。各活動ユニットの終段で各役割の進捗状況を全員でシェアし、役割遂行に向けたアドバイスをSGEの手法を用いて学級

全体で相互にシェアさせた。③QU学級満足尺度の集計結果とその変化は、ア.学級生活満足群は、38%から44%へ増加した。イ.非承認群は、15%から5%へと大きく減少した。ウ.侵害行為認知群は、17%から17%へと変化なし。エ.学級生活不満満足群は、28%から31%へ増加した。④要支援群は、2名から4名へと増加した。男子1名から1名へ変化なし、女子1名から3名へと増加した。

3. 結果、効果

(1)QU学級満足尺度に大きな変化が現れたのは、非承認群の割合がⅠ期からⅡ期にかけて10%減少した(Ⅰ期15%→Ⅱ期05%)ことである。これは、学級の中に存在感の薄い生徒がほとんどいなくなったことを示している。(2)次に変化の見られたことは、学級生活満足群の割合が、初め40%から、Ⅰ期38%へ、さらにⅡ期44%へと4割を超えて増加する傾向にある。(3)当該学級における承認得点が平均値32.3から33.7へと、1.4ポイント増加している。(4)当該学級における非承認得点が平均値22.3から21.3へと、2ポイント減少している。

〔考察〕

結論、反省と課題

(1)上記Ⅲ-3の結果から、次のことを得た。①今回の教育活動の結果、当該学級の中で、自己の存在が相互に認められ、ねらいとする凝集性の高い学びの準拠集団の形成に向けて、学級の人的環境が動いている。(2)要支援群にある生徒(男子1名、女子3名)について、教室の人的環境への継続的で組織的な介入が求められている。(3)侵害行為認知群にある生徒(男子5名、女子2名)について、教室の人的環境へのソーシャルスキル教育を前提にした、配慮とかかわりのスキル育成の教育的介入が求められている。

Ⅲ 分担研究(その2)

「養護教諭として学級活動に関わって」

1. はじめに

本学園は幼稚園から合わせると、長い者で12年間、この学園で学び、成長してゆく。そのため、幼い頃からさほど変わらない人間関係の中で過ごすことになる。ある意味では生徒同士は互いを理解し、仲間意識は強い。しかし、固定化した集団の中で疎外感を感じたり、周りからの見方や人間関係が変わらないため、集団がマンネリ化したり、互いを深く受け入れて関わりを持つということが希薄な面もある。すなわち、生徒にとって安心でき、自分らしく学び、他から吸収しようとする柔軟性が育っていないため、学級・学校が準拠集団になりえていないという現実がある。

そのような集団の変容を促すため、一人ひとりが自己理解を深め、自分に自信を持てるように支援してゆくことが必要であると考え。人と人との心のふれ合いを通して他者理解を促し、互いが安心感を持つことができ、認め合える集団を構築するために、カウンセリングマインドを基盤に学級・学校運営を行い、構成的グループエンカウンターを活用した集団づくりは集団の理解や心の安定をつくるためには非常に効果的だと考えられる。このような関わりやとりくみを通して、学校が楽しい、友達が好きだ、大人が信頼できる、人に優しく接したいという生徒を育てたい。

2. 養護教諭が集団指導に関わるにあたって

養護教諭は日常的に保健室でカウンセリングマインドを基盤にした対応を心がけて生徒に関わっている。生徒は日常的に保健室で弱音を吐いたり、うまくゆかない自分のイライラをぶつけたりしながら心のしんどさを訴えてくる。また、自分の居場所を確認するための拠り所としたり、教室とは違う環境を求めて、毎日多くの生徒が訪れる。その中で養護教諭として個に関わることが多いが、個を取り巻く関係に関わるには担任教諭との連携が不可欠である。担任と養護教諭が互いに情報を共有しあい、互いを補い合いながら生徒に関わることによって生徒との信頼関係や、生徒指導上の効果が高まると思える。

そこで、養護教諭と担任教諭が学級指導の中でT・Tで関わることにより、教師の願いを伝えたり、集団の中で配慮が必要な生徒への個別指導や対応がスムーズに、そして自然に行えるということが可能になると考えた。

3. 養護教諭が集団に関わるT・Tのメリット

- (1)授業や集団指導において、複数の人間が生徒に関わり、見守ることにより、多角的な見方や、多様な関わりが可能である。生徒の不安感や心の動揺にすぐに対応することができる。(集団の雰囲気が落ち着く)
- (2)養護教諭と生徒の日常的な関わりが増え、信頼感が生まれやすい。
- (3)集団の中で配慮の必要な生徒を把握することができ、学級の中や生活の中で個別指導がしやすくなる。
- (4)担任教諭と養護教諭が互いに専門的に関わることによって、多様な価値観が生徒と共有できる。
- (5)担任教諭と養護教諭の信頼関係が深まり、チームワークがよくなる。(互いが自信を持ち、認め合いながら生徒に関わることによって、生徒の中に情操的な効果が期待できる)

4. 養護教諭が集団に関わるT・Tのデメリット

- (1)養護教諭が学級に出向いているあいだ、保健室が留守になるため、他の職員や生徒の理解や協力が不可

欠である。(救急処置の対応、養護教諭が保健室にいないことへの生徒の不安感や不満がある)

- (2)全学年・クラスに関わることは時間的にも物理的にも難しい。

- (3)養護教諭自身の力量や、担任教諭との人間関係によって状況や条件が左右されやすい。

5. 集団指導に関わってみて

- (1)担任教諭との一体感が味わえる。(一人の人間として満足感がある)
- (2)集団の中での生徒の良さが感じられ、教室にいて自分自身が楽しいと感じられる。
- (3)学ぶ機会が増え、視野が広がる。
- (4)構成的グループエンカウンターを通して学級活動を展開してゆくことによって、学級内の人間関係や、担任教諭との関係がよくなる。(自分のことが認められる経験を積み重ねることによって安心感が生まれる。)
- (5)生徒の心の状態や集団の姿が見えやすい。
- (6)自分自身が魅力ある一人の人間として成長する機会となる。

6. 生徒の変容

本年度、一学年の学級・学年で担任教諭が構成的グループエンカウンターを実施している。まだとりくみを始めて数ヶ月だが、教室内の生徒の休憩時間の過ごし方が穏やかだと感じる。人をからかったり、疎外したり、けんかをするという場面に遭遇することが非常に少ないように思う。それぞれが自分の居場所を持っているように感じる。エンカウンターで今の自分の気持ちの表現の仕方を学び、自分以外の人の気持ちや考え方をじっくり聴くということを繰り返し行ってきた成果の一つではなだろうか。学校行事の文化祭では、一人ひとりが自分の役割に責任と自信を持って取り組んでいる姿が見受けられた。自分の個性や適性を知り、役立つ喜び、成功する達成感、違う者から学ぶ意欲を持つには、受け皿である学校集団を育ててゆく必要がある。一学年のとりくみが学校全体のものとなるよう、来年度は学校全体へ拡げてゆくことが必須だろう。これからも自分だけ、自分さえよければという自己中心的な考え方を許さない集団に育って欲しいと願う。集団の質としてはまだまだ未熟な部分は多いが、多くの人の立場や思いを尊重しようと風土は育ちつつある。集団を育てるために、まずは、保健室において個へのアプローチを大切に、集団へとつなげてゆきたい。

Ⅲ 分担研究 (その3)

「立式の多様性に気付かせる指導」
～「連立方程式」の授業を通して～

1. はじめに

これまでの学習指導を振り返るとき、依然として教師主導型の教授形態で、画一的に知識や技能を教え込む、固定化された指導の傾向が強かったように思われる。その結果として、生徒は「なぜ数学を学習するのか」「数学の勉強は何の役に立つのか」という疑問を持ってきた。また、数学の有用性や美しさ、学ぶことの楽しさ等が十分味わえないまま学習が進められてきたことは否めない。

さらに、問題解決の仕方を考えさせるときに、理解の速い生徒の発言によって進行してしまい、他の生徒の出る幕がない場合もある。また、いろいろな解決の方法がある問題でも、少し難しくなると理解の速い生徒の活躍場面の連続になったりすることもあった。

そこで、問題を与えて解かせる指導だけでなく、全ての生徒が自分の力で問題を作らせることにより、自分で作ったという喜びとともに、それをみんなで解くことによって、セルフエスティームを高め、自己有能感を持たせることができる。また、数理化してゆく過程で、さらに理解を深めさせることができると考える。

2. 授業の構想

(1)望ましい問題づくりの条件として、①生徒にとって学習の必要性・必然性があること、学習したことの良さを感じることができること。②生徒の生活経験や実態に即し、身近に存在するなどの現実性があること。③満足感、充実感、成功感等を体験でき、興味・関心や学習意欲を喚起し、持続するものであること。④生徒にとって驚き、不思議さ、新鮮さがあり、解決にあたって多少困難性があること。⑤多様な考えができ、発展性があること。

(2)問題解決の場面では、一人ひとりの自由な発想をできるだけいかにするために、多様な考えのまとめ方として次の4つのタイプに分類して考えた。①独立的な多様性：生徒たちが発表するいろいろな考えが数学的なアイデアとしてはそれぞれ妥当であるが、それぞれの考えは表面上では互いに無関係と認められる場合。②序列的な多様性：数学的な考え方として効率性に着目し、序列が認められる場合。③統合可能な多様性：共通性に着目する場合。④構造化可能な多様性：いくつかのグループにまとめることができ、さらに、それらのグループ間に関連性が認められる場合。

学習意欲を高めるために、問題づくりの段階から生徒を参画させることによって、自分なりの考えを持たすことの重要性を認識させ、問題解決の過程において

は、多様な考え方があることを知らせたい。

そのように考え、6月「連立方程式」という教材を使い2年生の授業を行った。

3. 教材観

いろいろな数量関係を式に表現するとき、1種類の文字を使うよりは、2種類の文字を使った方が数量関係の把握が簡潔で、立式が容易である。このことから連立二元一次方程式を問題解決で適用できる場面がいろいろ広がる。また、連立2元1次方程式を立式することによって、代数的な操作で身近な問題を解決できるという数学の有用性を感じ、数学を進んで活用する態度の育成につながる教材であると考えられる。

4. 生徒の実態

方程式を解く問題が好きな生徒はかなり多い。しかし、文章題が嫌いな生徒は多い。文章題が好きな理由は、「解けたときすごくうれしい」が多く、嫌いな理由は、「ややこしい」「式をたてるのが難しい」「問題の意味が分からない」などである。

5. 授業の構想

(1)単元の目標と計画 ①単元の目標：ア. 問題解決的な場面で連立二元一次方程式を用いて解決できるようにする。イ. 二元一次方程式とその解の意味を理解する。ウ. 連立二元一次方程式とその解の意味を理解し、簡単な連立二元一次方程式を解くことができるようにする。②計画：第1次、連立方程式と解。第2次：連立方程式の解き方。第3次：連立方程式の応用

6. 授業の実際

	生徒の活動	教師の働きかけ
第1時	1, 課題と学習の進め方について知る。 身近な生活の中で、どんな場面で連立方程式を利用すれば役に立つだろうか。実際に未知数が2つ以上の問題を作って解いてみよう。 2, 課題に取り組む ・身近な生活の中から連立方程式が作れるような問題をつくる。 3, 連立方程式を作って解を求め、解を吟味する。	・単元「連立方程式」のまとめとして位置づける。 ・連立方程式の応用との関連を明らかにする。 ・行き詰まっている生徒には、教科書の問題を参考にするよう助言する。 ・立式にあたり、図や表を書かせる。 ・いろんな立式の仕方を考えさせる。
第2時	1, 自分の作った問題を班の中で交流する。 2, 班内でお互いの問題を解く。 3, お互いの解き方を交流する。 4, 各班で発表をするためにまとめる。	・問題の同質性や異質性に気づかせる。 ・わかりやすいまとめ方や発表の仕方について助言する。

	生徒の活動	教師の働きかけ
第3 ～ 5時	1, 各班の問題を発表する。 2, 課題を解きあう。 ・いろいろな解き方を知る。	・問題の同質性や異質に気づかせる。 ・自分の力にあった問題を解く。いろいろな立式の仕方を考えさせる。

〈 生徒が作った問題 〉

①教科書や問題集でよく見る問題（解答省略）

1個120円のやっさ饅頭と1枚100円の3万石煎餅を合わせて34個買って、3800円払いました。やっさ饅頭と3万石煎餅の買った数をそれぞれ求めなさい。

三原から糸崎を越えて尾道まで往復しました。行きも帰りも登りは時速2km, 下りは時速6kmで歩いたところ、行きは、1時間40分、帰りは1時間かかりました。三原から尾道までの道のりを求めなさい。（解答省略）

②条件を変えた問題

タコとイカを売る店がある。タコを2000円、イカを1800円で売ったら昨日の売上は42000円だった。今日は、タコが昨日の50%, イカが60%しか売れなかったので、22800円だった。昨日のタコとイカは何匹売れたでしょうか。

立式, 1

昨日のタコとイカをそれぞれ y 匹, y 匹とする。

$$\begin{cases} 2000x + 1800y = 42000 \\ 0.5 \times 2000x + 0.6 \times 1800y = 22800 \end{cases}$$

立式, 2

昨日のイカを x 匹とする。タコは $21 - 0.9x$ 匹

$$0.5(21 - x) \times 2000 + 0.6 \times 1800x = 22800$$

立式, 3

昨日のタコを x 匹とする。

$$\text{イカは } \frac{70}{3} - \frac{10}{9}x \text{ 匹となる。}$$

$$0.5x \times 2000 + 0.6 \left(\frac{70}{3} - \frac{10}{9}x \right) \times 1800y = 22800$$

③発展的な問題

三原市と尾道市での森林のある面積は4:3です。そのうち、三原市と尾道市の境を変えたので、三原市の森林が200m²増え、三原市の森林の面積は、尾道市の森林の面積の2倍より200m²広くなりました。はじめの三原市と尾道市の森林の面積を求めなさい。

立式, 1

三原市の森林の面積を x m², 尾道市の森林の面積を y m²とする。

$$\begin{cases} x : y = 4 : 3 \\ x + 200 = 2(y - 200) + 200 \end{cases}$$

立式, 2

三原市の森林を $4x$ m², 尾道市の森林を $3x$ m²とする。

$$4x + 200 = 2(3x - 200) + 200$$

立式, 3

三原市と尾道市の森林全体の面積を m^2 とする。

$$\frac{4}{7}x + 200 = 2\left(\frac{3}{7}x - 200\right) + 200$$

三原市長と副市長を選ぶためにA, B, Cの3名から選挙を行った。当選したのはAとBだった。3名の得票総数は2771票で、Bの得票はAとCの得票数の平均より154票少なかった。もし、Aの得票の5%がCに移ったとすればBはCより8票少なくて落選したという。このとき、A, B, Cの各得票数を求めなさい。

立式, 1

A, Bを x 票, y 票とするとCは $2771 - x - y$ 票となる。

$$\begin{cases} y = \frac{x + 2771 - x - y}{2} - 154 \\ 2771 - x - 0.05x = y + 8 \end{cases}$$

立式2

A, B, Cの得票数を x 票, y 票, z 票とする。

$$\begin{cases} x + y + z = 2771 \\ y = \frac{x + y}{2} - 154 \\ z + 0.05x = y + 8 \end{cases}$$

8. 生徒の感想

①今までは、プリントや問題集を解くことが多かったけど、自分で問題を作るときちゃんと割り切れる答えが出るようにするために苦労した。②身近な生活の中で、連立方程式が使えるとは思っていなかった。③身近な問題から考えるのが難しかったけど、問題が解けたときはすごくうれしかった。④問題を作って、連立方程式でなくても解ける問題もあったが、やっぱり連立方程式で解く方が便利だと思った。⑤式をつくるときに、何を x , y とおくかによって解くときに簡単になったり複雑になるのに驚いた。

9. おわりに

生徒には問題を作ることは、問題を解く以上に大変なことであるが、目新しいことでもあり、友達と相談しながら意欲的に取り組む姿勢が見られた。いろいろな解決方法を比較する中で、それぞれの方法の良さが

見えてきて、連立方程式の良さを感じ取らせることができた。このような授業形態に慣れていないため、戸惑う場面もあったが、ある程度回数を重ねることによってこのような課題に対する学習方法が身に付き、より効果的であると思われる。学んだことを使って数学を身の回りの生活で積極的に活用して問題解決を行ったり、数学的な見方や考え方をするという意識と方法を他の単元でも身につけさせたい。生徒自ら作り上げ、発展させてゆくという主体的な学習に転換できれば学習意欲も高まり、数学はわからないという生徒も少なくなるであろうが、限られた授業時間数の中で、このような課題に取り組む学習を指導計画にいか位置づけ、効果的に実施してゆくのか検討する必要がある。

Ⅲ 分担研究 (その4)

「学習を共有化するための手だて」

1. はじめに

新学習指導要領の外国語の改訂は、国際化の進展に対応し、国際社会の中に生きるために必要な資質を養うという観点から、特にコミュニケーション能力の育成や国際理解の基礎を培うことを重視して行なわれたものである。

学習指導要領の外国語の目標には、次の3つの要素が含まれる。①外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養う。(コミュニケーション能力の育成) ②外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。(コミュニケーションへの積極性の育成) ③言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。(言語や文化と国際理解)

そこで、人と人とのかかわりを深めることを「外国語の学習を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度と、視野を広げ、異文化を理解し、尊重する態度の育成を図る」ととらえ、これらの態度を実践的なコミュニケーション活動を行なう中で育成してゆくことが大切と考えた。それでは人と人のかかわりが深まった状態とは具体的にはどのような状態を言うのか、以下に考察する。

a 自分とは異なったもの、異質なものに触れることで、自らの考えを深め、それから新しい表現方法を見いだそうとする意欲的な態度が現れた状態。

b 自らが主体的に、目的意識を持って取り組もうとする態度が現れた状態。

c 失敗から学ぼうとする意欲ある態度が現れた状態。

上記のような状態に生徒を近づけるため、人と人がかかわり、相互理解を深める中で、お互いの気持ちや考えを伝え合うなどのコミュニケーションを図る活動と、知識・理解を深め、定着を図る活動のバランス

をとりながら行なうことが必要であると考える。

2. 生徒の実態

本学園の生徒は12年間の幼小中一貫教育の中で成長してゆくため、同じ集団で長く生活している者が大半を占めており、仲間意識が強くお互いのことをよく理解している場合が多い。反面、人間関係が固定化し、一度根付いたイメージを払拭することが難しいという環境にあり、次のような現状が見られる。

a A E TとのTeam-Teachingを継続して受けているため、聞く力がついてきている。

b 発表活動には積極的であるが、発展性が乏しい。

c 与えられた以上のものを求めようとする意識がやや低いように感じ、受動的である。

b 英語に対する苦手意識が先行して、継続した学習をしようとする姿勢が見えにくい。

e 表現活動は得意とし進んでやるが、全体を見渡して動かず、自分本位で動いてしまい、学習の共有化ができにくい。

f 生徒同士がよさを認め、批評し合う中でよりよい学習集団とは何かを考え、育つてゆく姿が見えにくい。

g 言語の使用状況を理解できないまま、形式的に暗記するだけにとどめていて、発展性がない。

このような生徒実態を踏まえて、次のような仮説をたててみた。

3. 授業仮説

①英語の使用状況を考えさせる教材の開発をし、「英語を使用する必然性」を1時間の授業の中で、意図的に創る工夫をすれば、生徒は言語の使用状況を理解でき、発展性がうまれるのではないだろうか。②学習が積み重なることで、課題をクリアできる喜びや楽しさを味わえる体験をさせれば、継続した学習をする姿勢や、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育つのではないか。③コミュニケーション活動を通して、人と人がかかわり、学習の共有化ができれば、生徒同士がよさを認め、批評し合う中で、よりよい学習集団に育つてゆくのではないか。

4. 授業の様子

(事例1) 題材名: 「輪読に挑戦」

教材 : New Horizon 3 [Rejoice]

時間数: 2 (事前1/発表1)

教科書のリーディングのページを班ごとに暗唱し、全体で発表する。ただし、発表者は段落ごとに交替し、同一人物が続けて読むことはできない。評価項目にそって自己評価をする。評価観点は3項目とし、内容は次の通りである。

評価の観点: ①暗記 ②協調性 ③英語的発音

評価は4段階評価とした。

4 Very good / 3 good / 2 not good / 1 try hard

事前学習の1時間で、輪読する文の内容を解説し、意味が分かった上で、読みができるように配慮した。英語に対して苦手意識を持っている生徒に対しては、暗唱に入る前に、1文ずつ文を切り離したものを、1つの封筒に入れ、意味が通じるように文を並び替えさせるというゲーム性のある方法で、暗唱を取りかかり易く工夫をした。文を一文ずつ切り離すと、覚える内容が明確になり、視覚的に分かりやすい利点があったのかもしれない。生徒は、班ごとに自分が読む文を決め練習していた。一人の生徒が分担する文は1~2文で、困難を要する文ではなかったが、普通の暗唱と違い、班で輪読という形式が新鮮だったのか、生徒の活動は前向きで、お互いが励まし頑張る姿が多く見られた。発表当日、授業者がタイマーで発表時間数を計り、協調性のめやすになるように伝えたため、発表はより白熱したものになった。発表時間数は32.94秒~読み直しなどをふくめて40秒かかる班もあったが、発表者も聞く側も真剣な様子が印象的だった。

以下、生徒の自己評価カードを紹介する。

(A班) 33.59秒 ①練習はしたが、ど忘れしたりしていた。まあタイムはふつうだと思う。②練習したわりには全然できなかったの、もう一度やりたい。③ちょっと本番で間違えた。

(B班) 30.25秒 ①よかったんじゃないでしょうか…。(T) ②ゆっくり言おうと思ったけれど、ちょっと速くなった。でもうまくできた。③本当によかった。今までで一番よかった。Tはよくがんばった。④思ったよりは上手にできたけれど声が少し小さかった。

(C班) 25.68秒 ①短かったけれど、確実に読めた。Mがよくがんばっていた。②全体的によかった。みんなちゃんとできた。③協力して発表できたのでよかった。Mが一番よくがんばっていました。④本文を覚えられたし、みんなと協力してできたのが楽しかった。

(M)

(D班) 35.62秒 ①緊張したけど、速く読めたし、間違えなかったのよかったです。②全然ダメだったけど、最後までできてよかったです。みんなありがとう。③速くはなかったけれど、みんなよかった。④よく頑張ったと思う。

5. 今後の取り組みに向けて

自己評価カードにもかかわらず、TやMという他者を評価するコメントができてきたのは驚きだった。TやMは英語に関して言えば、苦手意識が先行し、学習の継続が難しく、習熟度もあまりよくない状態で、何より人とかわかるのを苦手としている。事前授業の際、

彼らの支援を考えていたが、班の中で活動する様子を見て、必要ないと判断した。生徒同士がかかわり、教え合って課題を克服するために試行錯誤している姿が見られたからである。発表前には「先生、本当にやるん？」と何度も聞きにきたTだが、発表は実に立派で、普段からは想像できない姿を見ることができた。頑張る姿は共感を呼び、思わず「T、すげー。」と「M、声でかい。」とのつぶやきもクラスで聞くことができた。本人の自己評価カードには肯定的なコメントが書かれてあり、これが学習の足がかりとなる体験になってくれればと思うと同時に、分かる喜びを共有化できる教材開発に取り組んでいきたいと考えている。

IV 結語

今年度の本共同研究で一定の成果を見たが、課題も明らかになった。来年度は、小学校とも連携してさらに研究を進めたい。今回の協同研究では、教育学部の縫部義憲先生、三原学園の岩崎文人校長先生、金丸純二副校長先生にお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

〔引用文献〕

- 河村茂雄 1998 たのしい学校生活を送るためのアンケート (中学校用) Q-U 図書文化
河村茂雄 2000a 学級崩壊に学ぶ 誠信書房 4-10, 29-33, 34-57, 61-76, 87-93
河村茂雄 2000b Q-Uによる学級経営コンサルティングガイド 図書文化
河村茂雄 2001 構成的グループエンカウンターを導入した学級経営が学級の児童のスクールモラルに与える効果の研究 カウンセリング研究, 34, 153-159
國分康孝・縫部義憲 1986 教師と生徒の人間づくり 第1集 瀝々社
國分康孝・縫部義憲 1987 教師と生徒の人間づくり 第2集 瀝々社
國分康孝 1987 学校カウンセリングの基本問題 誠信書房
今川卓爾 2001 総合的な学習の実践と評価 国際理解 指導と評価11月号 図書文化

〔参考文献〕

- 縫部義憲 2001 日本語教育学入門 瀝々社
山口大学教育学部附属光中学校 1975 認知と情意の統合学習 明治図書
George Isaac Brown 金子孫市監訳 人間性を培う教育 1971 日本文化科学